「隠された風景－死の現場を歩く－」を読んで

新聞の書評が目に止まり、新聞記者が地方版に連載ルポの「隠された風景－死の現場を歩く－」を購読した。

記者は、悲惨な事件を起こしたある少年の「どうして人を殺してはいけないのか」という問いに、大人がまともに答えられない現代社会の風潮に疑問をもち、「子どもたちに『生きている』というヒリヒリした実感がないことが、それらの背景にあるのでないか。ではなぜ、『生』の実感がないのか。それは『死』が隠されているからでないか。『生』を支えている膨大な『死』が、あたかも存在しないかのように見えない所に追いやられてしまっているから、逆に『生』が実感できなくなっているのでないか。」と思い、死に向き合うことは心の痛みを伴うが、「隠された『死』の現場をきちんとルポして人々の目の前に突きつけることなしに、これからの社会の展望は開けてこないのでないか。」と、気まぐれなペットブームの行き着く先、美食の陰に葬られる夥しい生命、等の殺処、屠蓄、屠鳥の現場からのルポ、また、人の人生の総括である遺書にまで踏み込んでルポしている。

ルポを続ける中で、記者は「自分やほかの何かを生かすために動物のいのちを絶つことは、決して『殺す』ことではない、それは自分やほかの何かを『生かす』ことであって、いのちを奪うだけで何も生まない単なる殺戮や虐待とは全く次元が違うということです。その全く次元の違うものを混同してしまっているから、差別や偏見が生まれ、混同に基づく『死』の隠蔽が、食物を粗末にし、いのちをないがしろにする今の風潮や自然破壊的な文化の背景にあるということです。」と、自分がたどりついた考えを述べている。そして、娘に自らの手での屠鳥を体験させている。

確かに、子どもに「いただきます」と挨拶することはしつけるが、自分が生きるために他の命を食するからこそ、「（命を）いただきます」と、感謝することを教えているだろうか。

「かわいい、わかいい」とペットを飼うが、世話が大変になると捨てたり、処分を動物管理センターに持ち込む、この矛盾。

「命を大切に！」と教えながら、校庭に入ってきた犬の捕獲を動物管理センターに依頼し、「捕獲は子どもの目に触れないところで…」と云い、捕獲後どうなるなるかを教えない教育者の身勝手…。

自らが「生きる」ことは、多くの命の死のお陰であることを今一度実感するために、一読をお勧めします！

（2005 年 3 月 21 日　記）